

Title	松本周「一九四五年以降の北東アジアと教会：日本国憲法との関わりから」に対するコメント
Author(s)	安, 教盛
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55 別冊, 2013.3 : 85-89
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5005
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

松本周「一九四五年以後の北東アジアと教会

——日本国憲法との関係で」に対するコメント

アン・ギョソン

1. 感謝

まず、貴重な論文を拝読し、コメントできる機会を持てたことを大変喜ばしく思う。

2. 論文の概要と論点

本論文は三年にわたった日韓教会史に関する連続研究の一環で、第二次世界大戦以後の現代史を扱っている。筆者（松本周）は、すでに第二回大会で三・一運動当時に関わる論文を発表したことがある。筆者は本論文の論文題目に提示されたように、一九四五年以後の北東アジアと教会の関係に焦点を当てており、特に日本国憲法との関係に焦点を当てている。

筆者は一九四五年以後の日本社会を検討するのに、二つのキーワードを使う。一つは平和であり、もう一つはデモクラシーである。実際に、日本は少なくとも憲法上では平和の社会である。そして日本は、明治維新以後、デモクラシー社会として存在してきたと言える。

筆者はこんな前提の上で、戦後日本社会でマルクス主義とキリスト教が注目された事実を指摘する。前者は非転向主義として、後者は再西欧化の一環として言及している。

筆者は、引き続き日本国憲法九条の意味を深く掘り下げる。第二次世界大戦終戦以後に続いた冷戦時代において日本の平和主義の歴史と多様な議論を紹介する。一つは平和至上主義で、他の一つはそれに対する反論である。反論の背景には反米主義、平和と自由および民主主義の関係などが論じられる。一方、大韓民国（憲法）五条の意味にも言及している。筆者は、両国の憲法前文にリベラル民主主義の価値を共有する共通性が現れるという。そしてリベラル民主主義の根源を一七世紀ピューリタン革命まで遡及しながら、その重要な特徴として抵抗権に言及している。なぜなら抵抗権を認めないで、基本的人権を擁護するのは難しいからである。そして、これは国内的状况にも国際的状况にも適用されるという。

筆者は、結論の部分で抵抗権と人権の関係に関する自身の主張に基づいて、平和主義は決して単純な絶対平和主義になれないと言う。筆者は戦後、朝鮮戦争およびベトナム戦争など二度にわたったこの上なく大きな戦争があり、このような緊張があるアジアで、日本が憲法九条を守りながらも北東アジアをより平和的な関係とする方策はどのようなものかと問う。筆者はこの質問がオープン・クエスチョン（open question）と言いながらも、次のような代案を提示する。すなわち、民力の向上と、より一層共和国的な姿を現す方向としての憲法形成を打ち出す。そして教会はこういう過程で神の国を指向して歴史の中で証明しなければならない存在だと主張する。

3. 論文に対する質問

討論者（アンギョソン）は、本論文が短い分量にもかかわらず、長期間の歴史と膨大な政治的テーマを扱うことによって、日韓関係、日韓キリスト教関係はもちろん、アジア関係、アジアのキリスト教関係に対する理解を高め、新しい見解を提供するのに大きく寄与したと考える。しかし、本論文の主張がより一層鮮明になってその意義をさらに高めるために、討論者の義務により、次のようないくつかの質問をしようと思う。

最初に、平和の概念は重要ながらも膨大な概念であるが、日本の脈絡で果たしてどんな意味があるのか訊ねたい。たとえば日本の歴史の中で平和は多様な姿を見せてきた。先に、筆者が一九四五年以前に関して述べた論文で具体的な言及はなかったが、日本は一九四五年帝国主義時代においてローマ的平和（Pax Romana）に該当する日本的平和（Pax Japonica）を、いわゆる“大東亜共栄圏”というイデオロギーを通じて試みたことがある。このような帝国主義的平和は日本には平和だが、アジア国家には反平和（enshalom）であった。次に、一九四五年以後には日本が平和憲法を持つ憲法上の平和国になったが、その平和は与えられた（given）あるいは強要された（enforced）平和の性格が大きい。したがって、このような平和の内面化（internalization）あるいは受け入れ化（appropriation）過程が必要である。そして、はたして、その過程が真の平和になっていくのか、偽りの平和になっていくかは日本キリスト教徒を含んだ日本人の手にかかっている。筆者（松本）の言葉を借りれば、民力の向上とより一層共和国的な姿を持った憲法にかかっているとさえいう。一言付け加えれば、今日のJPIC（Justice, Peace, and the Integration of Creation）というエキュメニカル神学の主題のように、平和が正義や生態との関係の中で理解されて推進されねばならないであろう。

二番目、民主主義の概念もやはり重要ながらも膨大な概念であるが、日本の脈絡で果たしてどんな意味があるのか訊ねたい。筆者は先んじた論文で一九四五年以前の民主主義は民本主義に近いと言った。そして筆者は全般的に、特に一九四五年以後の時期において、リベラル民主主義を民主主義と同一視するようである。これは日韓関係、あるいはアジア全体を見れば、また他の意味を持つことになる。韓国は解放と共に分断されたため、単純に国家の再建(reconstruction of a nation)でなく、ある種の国家の再建(what kind of nation)という問題に直面した。韓国は民主主義の性格を選ばなければならず、その結果、人民民主主義と自由民主主義との対立的な国家ができ、自由民主主義を維持するために戦争という犠牲まで払った。ところでこのような韓国の運命は日本帝国主義という過去の遺産と深い関連がある。したがって、日本の民主主義は日本自体だけでなく、隣国、アジア、進んで世界の運命と密接だという点が浮び上がらなければならないであろう。万一、日本帝国主義時代の民主主義が、民本主義でないより一層真の民主主義に変わっていったなら、日本とアジア国家の歴史は全く変わっただろう。このような運命共同体的状況は今日も同じだという点が強調されるべきである。

三番目、筆者は抵抗権と人権の関係が国内だけでなく国際的にも適用されると言った。そして国際関係で絶対平和主義は難しいと言う。それなら、抵抗と戦争の関係は何だろうか。言い換えれば、国際的な関係で戦争なしで抵抗する方法は何だろうか。

四番目、最後の質問である。日本の平和と民主主義の発展過程で、日本キリスト教が持つ特異性と長所は何だろうか。そして日本の平和と民主主義の発展のために、また、韓国の平和と民主主義の発展のために、両国のキリスト教がそれぞれ、そして共に寄与できる方策と分野はどのようなものだろうか。

4. 結び

上で言及した質問以外にも多くの質問があり、学びたいことは多い。それは本論文がそれだけ多くの情報と教訓を与えているためである。貴重な論文にもう一度感謝申し上げて、以上でコメントを終えたい。